The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	成果を見極めて次の展開を
Author(s)	栗本, 英世
Citation	GLOCOLブックレット. 2016, 18, p. 20-25
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55598
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

1-3
成果を見極めて次の展開を

栗本英世　大阪大学大学院人間科学研究科教授

聞き手―**島薗洋介**

文理融合の共同研究の推進

――　栗本先生は、2007年8月26日から2011年8月25日にわたって、センター長を2期にわたってつとめられました。栗本先生がセンター長をつとめていた時期に、グローバル化した世界のさまざまな問題について研究・教育・実践をおこなうというGLOCOLのコンセプトが具体化されていったと思います。そのなかで特にGLOCOLで食や紛争、人間の安全保障、健康環境にまつわる教育の共同研究がおこなわれるとともに、高度副プログラムの開発、グローバルコラボレーション科目の設置、それから海外体験型教育プログラムの開発ということもおこなわれました。

本日は、こうした研究・教育・実践活動の展開の経緯についてお聞きして、最後にGLOCOLの9年間の成果をふまえたうえでグローバル化時代における大学のあり方、阪大の役目、あるいは阪大でなくても日本の大学一般にいえることを先生からご提言いただきたいと思います。

まずGLOCOLにおける共同研究が特に人間の安全保障や食、健康環境の3つが大きな共同研究の柱になっていたと思うのですが、こういった共同研究がおこなわれるようになった経緯について教えて下さい。

栗本　その問題よりもう少し戻ってお話すると、GLOCOLが4月1日に設立されて、私は5ヶ月足らずの設立直後に、初代センター長の小泉先生から、センター長を引き継ぐことになったのです。だからまだGLOCOLがかたちを整えつつあるときにセンター長になって4年間つとめたわけです。センター長になるにあたって考えていた点というのが3つあります。

一つ目は、いかにGLOCOLという存在を阪大内部で認知してもらうか、ということです。それについては当時の阪大の執行部のなかにお二人強力なGLOCOLのサポーターがいらっしゃった。副学長だった小泉先生と国際交流担当の理事をやっていた辻先生です。それに加えて、阪大の主として前期課程の院生、研究科をこえて理系文系にかかわらず、院生に意味のある役に立つ教育プログラムを提供することによって、GLOCOLが大学のなかで認知されたのだと思います。

もう一つは教育プログラムの開発と運営に際しては、優れた研究者でないといけないということです。優れた新しい教育プログラムは、優れた研究にもとづいてなければなりません。だからGLOCOLの教員、特任のみなさんも含めてそれぞれの分野で一級の研究者でなければいけないという原則を最初から堅持していました。

三つ目に、GLOCOLという組織は、小さいけれどもいろいろな阪大内外の研究のハブ、結節点になるべきだという考えがありました。

新しい研究ということで強調したのは文理融合ということです。理系文系の研究分野をこえた新しい共同研究をGLOCOLが中心になって進めていく。GLOCOLがはじめた共同研究というのは、そういう趣旨にもとづいているわけです。それは研究の種まきみたいなものであって、苗床をつくって種まきをするということです。いずれ芽がでてきたら科研費その他外部資金を申請してもらう。その立ち上げ、とっかかりをGLOCOLがやるということです。だから意図的に既成の研究領域、文系理系をこえたものを優先的に採用しました。

私は、阪大に来る前は研究所におり、その研究所はどちらも全国共同利用機関でした。一つは東京外国語大学のアジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）で、もう一つは国立民族学博物館（民博）、どちらも大学共同利用機関で共同研究をやっていました。その共同研究のアイデアというのは、そもそも京都大学人文科学研究所の共同研究からはじまっています。1950年代に京大人文研で桑原武夫がはじめたような共同研究です。それが東京外大のAA研や民博に引き継がれているわけです。私はそういう共同研究というのがずっと頭のなかにあって、自分はそのなかで育ってきたから、そういうものを阪大でもやりたいなと思ったのです。もちろん予算規模が全然違うし、GLOCOLは全国共同利用機関でも何でもないから、強いていえば学内の共同利用施設みたいなものです。

どういうトピックが当時の阪大に適しているかというと、誰が考えてもそうなると思いますけれども、一つは環境、健康に関わる問題です。それは文理融合に適したトピックなのです。GLOCOLができた当初から研究と実践、および教育にかかわる二つの柱があって、一つは人間の安全保障で、もう一つは多文化共生です。ですから共同研究もその二つに関わるものが多かった。健康や食、環境の問題はおおむね人間の安全保障に関

わる問題です。

世界を見る目をひろげてもらう

――　教育プログラムの方にお話をうつしますと、GLOCOLは2009年から高度副プログラム、2011年からGLOCOL科目を設置されて、海外体験型教育プログラム、FIELDO（海外体験型教育企画オフィス）も2010年に設置されました。こういったプログラムをどういう経緯で開発されていったのか基本的なコンセプトを教えていただきたいと思います。

栗本　基本的なコンセプトは小泉先生がすでにお話になっていると思いますけれども、基本は単純にいうと阪大の学生に広い世間をみてもらうということです。日本語における世間は本来は日本の社会のことを指すわけですけれども、もちろん世界中に広げてもいいわけです。現在の阪大に入学してくるような人のバックグラウンドはかなり限定されています。日本の都市の中産階層以上の人が多いです。ある限定された社会経済的文化的な状況のなかで育ってきているわけです。日本の国内でも地方にいったり社会階層の下の方にいったりすると、その人たちの知っている世界とは全然違う世界があります。日本から一歩でればまた違う世界があるわけです。つまりわれわれの世代からみると、いまの学生のみなさんの世間は狭いです。広い世の中にはいろいろな人がいる、いろいろな生活をしていることを直接体験してもらう、世界を見る目をひろげてもらうというのが一番基本的な趣旨です。

――　いまの学生の世界は狭いと先生はおっしゃいましたけれども、ある意味われわれの時代とまったく違うのは、インターネットなどで海外にでる機会や海外の情報も触れることが多くなっているというのとは違う意味で、学生の世界は狭いということでしょうか。

栗本　それについてはいろいろな分析がされているし、いろいろな言い方が可能だと思いますけれども、いろいろな種類の情報が簡単に入手できるようになっていることは確かです。しかし、若い人たちがそもそもどういう情報を求めているのかという問題があります。情報というのはこちらが求めればいくらでも手に入れることができる。黙っていて入ってくる情報はある意味限られています。常に情報のシャワーにさらされているようなものなのですけれども、それと少し違う情報に触れようと思ったら、自分で踏み込んでいかないといけない。しかし、一般的な傾向として、海外に出ていきたいという学生が実は減っているということがあります。要するに内向きになっているというところが事実としてある。情報の世界がひらかれているけれども、他方で日本人全体、特に若い人が内向きになっている。それは確かにあると思います。

――　海外体験型教育の企画は、もともと学際的にいろいろな研究科と共同しておこなわれたと思いますが、こういった海外体験型教育企画オフィスというのを設けるようになった経緯や、そういったなかでプログラムの中身についてのコンセプトをどのようにGLOCOLがたてていったのかについて簡単にお話いただければと思います。

栗本　それは2009年度に概算要求したのです。GLOCOLのような特別予算で運営されている組織の問題は、毎年予算が減っていくということです。従って3年目が終わったときに、増額の概算要求したわけです。それはまったく驚くべきことに全額認められました。これはきわめて異例なことなのです。それはそのときにおこなった概算要求の中身が阪大本部も文科省も財務省も意味があると、必要であると認めたということの証拠です。海外体験型教育を企画して運営していくという主旨で増額を求めたわけです。

それを運営していくために、のちにFIELDOと呼ばれる海外体験型教育企画オフィスを設置して、小さいセンターですけれども、そのなかにオフィスがあって、半独立的に別個に運営されているという組織です。そのオフィスが阪大の中のいろいろな研究科と連携し、新しいプログラムの開発をしていくという体制です。

海外体験型教育をやるうえでは、セキュリティの問題や安全の問題も含めて、さまざまなテクニカルな問題があります。学内の調整、国外の受入先との調整など、それに固有の業務というのがたくさん生じてきます。したがって、センター内に新しい組織をつくってあるのは、妥当な現実的な方法だったと考えています。

――　海外体験型教育プログラムを全学的に展開する部門をつくるにあたって、モデルとなるような事例は他大学にあったのでしょうか。

栗本　海外体験型教育については、国立の大学は遅れていたのです。私立の一部は進んでいました。GLOCOLの最初の教員の一人に和栗さんがいました。和栗さんは早稲田からきていただきました。早稲田は2007年当時、阪大よりずっと進んでいたのです。したがって早稲田から和栗さんにきていただいて、それをある意味で移植したわけです。国立大学法人のなかでは最初だけれども、日本のなかではいくつかの私立は先にそういったことをしていた。したがって和栗さんは引き抜かれて、福岡県立女子大学で頑張っています。私立大学の海外体験型教育は主として学部生を対象としたものだったので、前期課程大学院生を対象にした大阪大学の高度教養プログラムというアイデア自体が全国のなかでも2007年当時は先駆的

でした。

――　いま先生がおっしゃったようにいくつかの私立大学は先駆的なことをしていたわけですけれども、予想しなかった問題とか、こういったプログラムを運営するなかででてきた困難とかそういったことはありましたでしょうか。

栗本　予想していなかったことはあまりありません。これは予想していたことであらためて確認したことです。

その前にすでに私立でおこなわれていたこういうプログラムと、GLOCOLがやってきた違いは、私学の方は主な対象が学部生です。GLOCOLがやってきたことは主として前期課程院生で、それは違いがあります。外国に行くだけで意味があるというわけではありません。外国にいってちょっと英語を話してみましょうというだけで意味があるというわけではありません。ある専門性が要求されます。そのプログラムもよく練られていないといけません。

あらためてわかったことは、こういうプログラムをやることは手間ひまがかかる。したがってコストパフォーマンスは低い。これはマスプロの教育の対極にあります。非常に贅沢な教育です。それは大阪大学だからできるということです。優れた教員がいて、数名～10名くらいの参加者に極めて手間ひまをかけた教育プログラムを提供します。ただ、その問題というのは阪大の前期課程院生といっても1学年2000人いますから、全員に提供するのは無理です。せいぜい1割です。1割でも意味があります。阪大のような大学だからこそ、やる価値があるものだと思います。

――　主に学部生よりも前期博士課程の大学院生に提供するとなると、よけいに手間ひまの部分が難しい部分が強くなってくると思うのですけれども、そのところは学部生ではなく前期の院生を主な対象とした理由は何かあるのでしょうか。

栗本　そもそも高度教養プログラムというのは院生を対象にしています。もちろん学部を卒業して大学院に行かずに就職される学生のみなさんも各分野でリーダーになっていくわけですが、大学院を修了した人の方がより専門的な知識と能力を身に付けてそれぞれの分野で活躍していくわけです。高度教養プログラムの趣旨は、そういう専門的な知識を身に付けて、世界中で活躍する人がよりひろい視野をもってほしい。本来のその人の専門だけではなくて、プラスαで。もちろん専門が一番大事でちゃんと勉強してほしいのですが、時間的余裕をみつけて海外体験型教育プログラムにも参加してほしいということです。したがって現実的な問題は最初からわかっていたことですが、院生のみなさんも専門の勉強でそれぞれ忙しいわけです。そのなかでいかにGLOCOLがやっているプログラムに参加していただけるのか。理科系のハードコアな部分はなかなか難しい部分があります。

GLOCOLセミナーは人的ネットワークを拡大する手段

――　教育とともに研究と実践、これらの3つを連関させて行うということがGLOCOLのコンセプトにおいて重要であるということで、GLOCOLの内部で横断的な地域や専門性を横断した共同研究がおこなわれていて、そういったコミニュケーションがあったからこそ、いろいろな教育プログラムができたという点もあるのでしょうか。

栗本　共同研究はそのうちの一つであって、メインではありません。あとはGLOCOLセミナー。当初は、そのセミナーにGLOCOLの教員が全員参加していました。セミナー自体がいろいろな人的ネットワークを拡大確立することの手段の一つであるという位置づけでした。だんだんそれが薄れていきました。いろいろな共同研究も含めて教員個人は個人研究をやっています。科研費のプロジェクトもやっています。GLOCOL教員の個人研究および外部資金をとってやっている科研費プロジェクトも含めて、さまざまなプロジェクトを有機的に総合するというモメントが低下していった部分もあります。それは端的にはGLOCOLのスタッフ相互の対話、議論の低下です。みなさん忙しくなったこともあると思います。

――　そういったGLOCOLの9年間の成果をふまえたうえで、グローバル化時代の大学のあり方が今回の連続セミナーのおおまかなタイトルなのですけれども、特にGLOCOLの9年間の成果をふまえてこういった部分を阪大で継承すべき、こういった部分を他の大学とかでも教訓として伝えるべきだと先生がお考えになることがありましたら。

栗本　まずGLOCOLがやってきたさまざまな教育プログラムは、どういう成果があったかということです。それに参加した学生たちがどういう経験をして、どういうふうに成長したのかにまず目をむける。その連続セミナーの最後の第4回目は私も出ました。サクセス・ストーリーを選んだのだと思いますが、4人のみなさんの発表は素晴らしかったです。あれをきいてやはりGLOCOLをやってきてよかったとあらためて思いました。全体的に何百人かの人が参加してどういう効果があったのかはよく見極めないといけない。私は非常にポジティブな成果があったと思っていますけれども、それをさらに引き継いで展開しようと思ったら、どういうことをしないといけないか考えないといけないと思います。